

模擬裁判を通して考える法教育のあり方

藤 井 剛*

1 はじめに

平成 25 年度から年次進行で実施されている高等学校新学習指導要領には「法教育」が明記され、特に「裁判員制度」を扱うこととされている。

高等学校学習指導要領 公民（抄）

〔現代社会〕

- A. 現代社会における諸課題を扱う中で、（中略）幸福、正義、公正などについて理解させる（下線は筆者、以下同じ）（内容(1)）。
- B. 法に関する基本的な見方や考え方を身に付けさせるとともに、（内容(2)ウの取扱い）。
- C. 経済活動を支える私法に関する基本的な考え方についても触れる（内容(2)エの取扱い）。

〔政治・経済〕

- A. 日本国憲法における（中略）法の意義と機能、基本的人権の保障と法の支配、権利と義務の関係（中略）などについて（中略）考察させる（内容(1)ア）。
- B. 「法の意義と機能」、「基本的人権の保障と法の支配」、「権利と義務の関係」については、法に関する基本的な考え方を身に付けさせるとともに、裁判員制度を扱うこと（内容(1)アの取扱い）。

また、平成 21 年 5 月に「国民の司法参加」制度である裁判員制度がスタートし、平成 25 年 10 月末までに、5,479 の裁判員裁判が開かれ、33,467 人が裁判員として裁判に臨んでいる¹⁾。裁判員制度を円滑に実施するためには、幅広い層の国民による主体的・積極的な参加が求められるが、そのためには高校生に制度の意義や重要

性を理解させ、自らが将来の裁判員制度を担うとの意識を持たせる必要がある。このような理由で平成 18 年度から模擬裁判を実施してきたのである。

本稿は、これまで 7 年間にわたり実践してきた模擬裁判を通して法教育のあり方を考えるものである。なお本実践は、昨年度まで勤務していた千葉県立千葉高等学校での実践をまとめたものである。

2 「法教育」と「模擬裁判」

「法教育」とは、「法律専門家ではない一般の人々が、法や司法制度、これらの基礎になっている価値を理解し、法的なものの考え方を身に付けるための教育」と定義されている。そのために、「相互尊重のルール」「私的自治などの基本的な考え方」「憲法などの基礎にある考え方」「司法の役割」などを理解させる教育である²⁾。そして、法教育を通じて育成されるべき能力・資質として「第 1 に、公正に事実を認識し、問題を多面的に考察する能力、第 2 に、自分の意見を明確に述べ、また他人の主張を公平に理解しようとする姿勢・能力、第 3 に、多様な意見を調整し、合意を形成したり、また公平な第三者として判断を行ったりする能力」などが挙げられている³⁾。

ここから分かるように、「法教育」は「模擬裁判の実践」だけを指すものではない。ましてや「法律」を教材などで扱った教育を指すものではない。やや抽象的だが、「法律の内容」を教えるのではなく、「その法律が制定された背景を理解させ、その上で法的な思考力などを育成する教育」である。例えば、「労働基準法の内容」を教

*千葉県立千葉工業高等学校

えるのではなく、労働法が生まれてきた背景＝「契約自由の原則を変更してまで、なぜ労働法制が必要なのか」を、討論やロールプレイなどを活用しながら理解させていくことが求められている。これまで「法教育」と銘打った「模擬裁判」や「労働法教育」が行われたり、実践発表が行われているが、単年度のイベントであったり、年間カリキュラムに位置づけられておらずどのような能力を段階的に伸ばすかが明示されていなかったり、個別の法律の内容を教え込む授業であったり、生徒の変容などの分析に欠けるものが多く見られた。そのような「模擬裁判」や「法律を扱った教育」は、上記の「法教育の定義」と「能力・資質の目標」に沿うものとは言えないであろう。

これまでも「法」に関する授業は行ってきたが⁴⁾、上記の「法教育の定義」と「能力・資質の目標」を意識して模擬裁判を始めたため、模擬裁判実施前に「司法制度改革」全般を説明し、裁判員裁判は「身近な法律・裁判」を実現するための制度であることを理解させている。そして、「政治・経済」の目標を「課題を発見して、一次資料を集め分析し、意見をまとめて発表し、意見交換を行う能力・資質の育成」と定め（後述する）、その上で次の3点を模擬裁判の目的とした。

- ①裁判員制度への参加意識を醸成する（本発表はこの点を中心に報告する）。
- ②刑事裁判における裁判官・検察官・弁護人の役割、刑事裁判のルールと国民の役割を理解させる。
- ③法律の専門家でない市民が、刑事事件に参加しても適切な判断ができることを理解させる。

3 年間指導計画上の位置づけ

前述したように、私は「政治・経済」の目標を大きく「課題を発見して、一次資料を集め分析し、意見をまとめて発表し、意見交換を行う能力・資質の育成」と定め、年間指導計画を作成してきた。具体的に昨年度は、1学期の前半に

経済原論を講義し、後半にディベートを実施して「討論スキル、資料活用能力、意志決定能力」などを高め、2学期の前半に政治原論の講義を行い、後半に政党作りで「討論スキル、資料活用能力、合意形成能力」などを高め、3学期に国際関係の講義と模擬裁判（司法制度改革の特別授業を含む）を実施して、1、2学期に培ってきた能力の集大成を目指すような年間カリキュラムを編成し実践した⁵⁾。

4 指導計画

(1) 事前授業（5時間）

模擬裁判実施の約1ヶ月前から「特別授業『司法制度改革』」を実施する。裁判員制度が突然出てきた制度ではないこと、「身近な法律・裁判」を実現するための制度であることを理解させるためである。そして、裁判員制度の意義や重要性を認識させることによって、裁判員制度への参加意識を高めようとしている。特別授業の内容は以下のとおりである。

- ①司法制度改革の背景と改革の内容（裁判員制度、法曹人口の拡大、法科大学院の設置、裁判迅速化法、犯罪被害者基本法、法テラスの設置など）（2時間）
- ②陪審制、参審制、裁判員制度（1時間）
- ③日本の刑事手続きの流れと裁判員制度の課題（1時間）
- ④DVD⁶⁾による「模擬裁判」の解説授業（1時間）



写真1 模擬法廷の様子

(2) 県立千葉高校の模擬裁判の特徴

模擬裁判の実践例は多い⁷⁾が、県立千葉高校の模擬裁判はいくつか特徴がある。

まず、2学年(学年8クラス)必修の「政治・経済」の授業で実施するので、毎年、2学年生徒全員が模擬裁判を体験することである⁸⁾。第2に、裁判劇そのものは、各クラス15名の生徒が行い、その他25名の生徒は傍聴人となる。しかし、役者の生徒・傍聴人の生徒も含め、クラスを5つのグループに分け、全員が評議を行うことである(5つの評議体が出来るので、判決も5つ下される)。第3に、法律上のアドバイスのために、全クラスそれぞれの評議体に1名以上の法曹関係者(検察官・弁護士)、または県立千葉高校を卒業したロー・スクールの学生を配置することである⁹⁾。また全ての関係者とは全日程終了後、毎年反省会を開き、次年度に向けて改善点を研究している。第4に、シナリオ¹⁰⁾は用意するが、「証人質問」「被告人質問」「論告(求刑)」「最終弁論」は変更を可とすることである。弁護士役・検察官役とも、毎年かなり変更していた。最後に、千葉地方検察庁の「特設模擬法廷」を利用するので、実際の法廷に近い環境で実施できることである¹¹⁾。

これらの特徴は、他で報告されている模擬裁判の実施形態とは大きく異なっている。

(3) 模擬裁判の準備

特別授業と並行して、各クラスで役割分担を決める。配役は、裁判官(3名)、裁判員(6名)、検察官(2名)、弁護士(2名)、被告人(1名)、証人(1名)である。配役以外の生徒は「傍聴人」となるが、生徒全員が裁判員として評議を行うため、傍聴人も裁判員裁判と同様、被告人質問などを可とした。

各班に配置するアドバイザーは、千葉地検(1～2名)、千葉県弁護士会(1～3名)とロー・スクール在籍の卒業生(1～3名)とした。また、配役にあたった生徒を集め、「シナリオ」を配布し¹²⁾、事件の概要、ストーリー、証拠などは動かせないが、証人・被告人質問・論告求刑・

最終弁論はアドリブを可とし、作戦を練らせた。さらに、証人と被告人に対しては、シナリオ以外の質問に答えられるよう、役になりきるよう十分指導した。

(4) 模擬裁判当日

特設模擬法廷に13時頃に到着し、模擬裁判を開始する。

模擬裁判終了後、裁判員役は別室へ移動して評議を開始する。その後、傍聴人たちは「有罪派」「無罪派」に分かれ、それぞれほぼ同数になるように4つの評議体に分かれ、評議を行う。ほぼ同数にする理由は、評議体のメンバー全員が「有罪派」だった場合議論にならないなど、評議の偏りを防ぐためである。

約1時間半の評議後、各班の裁判長が被告人に判決文を読み上げ、その後、アドバイザーなどによる講評を行う。終了は15時半過ぎだった。

(5) 事後指導

アンケート¹³⁾を実施し、模擬裁判や特別授業などを振り返らせる。また、「自分の所属した裁判員の評決と自分の意見の相違」のレポートを課す。このレポートが「模擬裁判」の評価材料となる。

5 模擬裁判実施による生徒の変容

(1) 裁判員に参加する気持ちは変化したか？

前述したように、模擬裁判実施の第一の目的



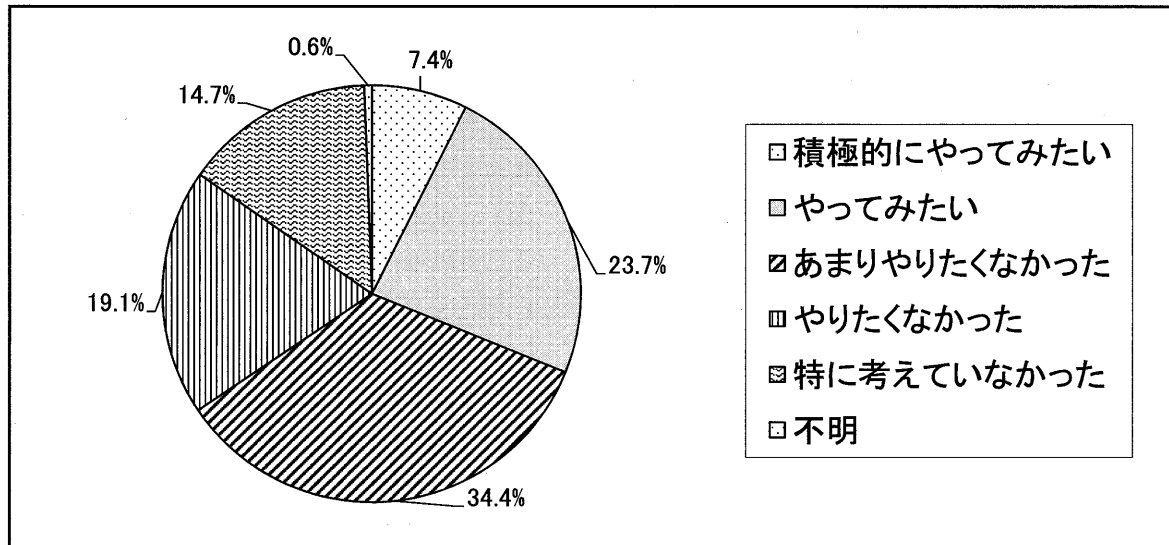
写真2 模擬裁判の風景

は「裁判員制度への参加意識を醸成する」ことである。その目的が達成されたかを検証したい。

裁判員に対して国民の参加意識は低い。「義務であるから、なるべく行かなければならないと思う（57.9%）」、「義務だとしても行くつもりは

ない（25.9%）」という意識である（「裁判員制度に関する世論調査」平成21年6月、内閣府）。

裁判員を経験する前の図1では、裁判員を「あまりやりたくなかった」「やりたくなかった」が合わせて53.5%と半数を超えているが、裁判

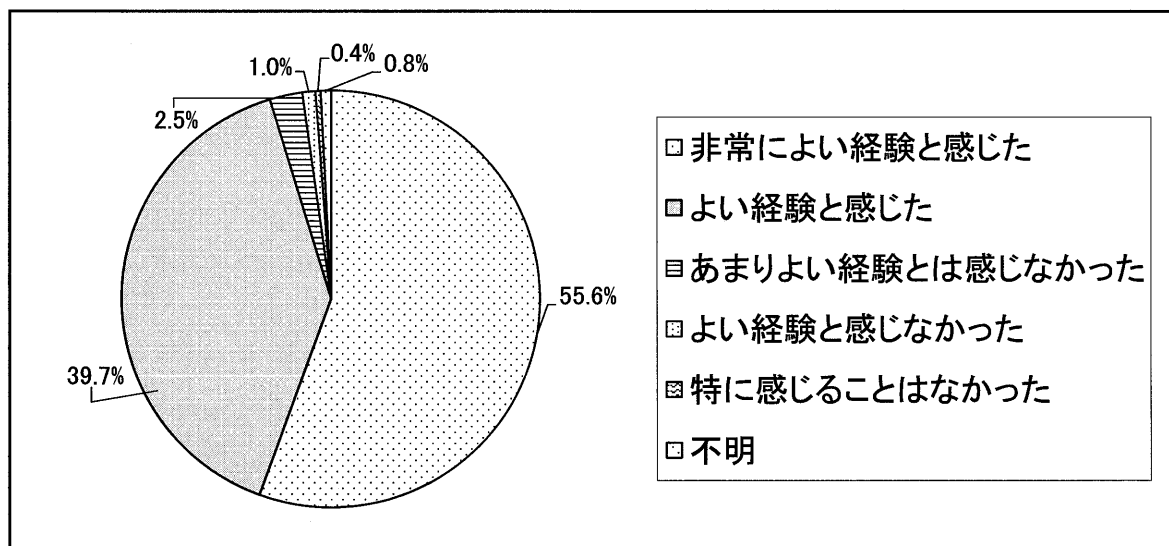


（「裁判員等経験者に対するアンケート調査結果報告書」平成23年3月，最高裁判所）

図1 裁判員に選ばれる前の気持ち

員経験後の図2では、裁判員参加に対して「非常にいい経験と感じた」「いい経験と感じた」が合わせて95.3%と大多数を占めている。このこ

とより、裁判員を経験すると裁判員への障害が取り除かれ、裁判員制度への評価が積極的になることが分かる。



（「裁判員等経験者に対するアンケート調査結果報告書」平成23年3月，最高裁判所）

図2 裁判員として裁判に参加した感想

生徒の模擬裁判実施後の意識は図3のとおりであり、「はじめはなりたくなかったが、なっても良いと思うようになった」との回答が38.1%であり、「いまま変わらない」回答と合わせて80%近くの生徒が「裁判員になっても良い」気持ちに

なったことが分かる。このことから、図1、図2同様、実際に「模擬裁判などを経験することによって、裁判員に参加する高校生の気持ちは変化する」ことが分かる。

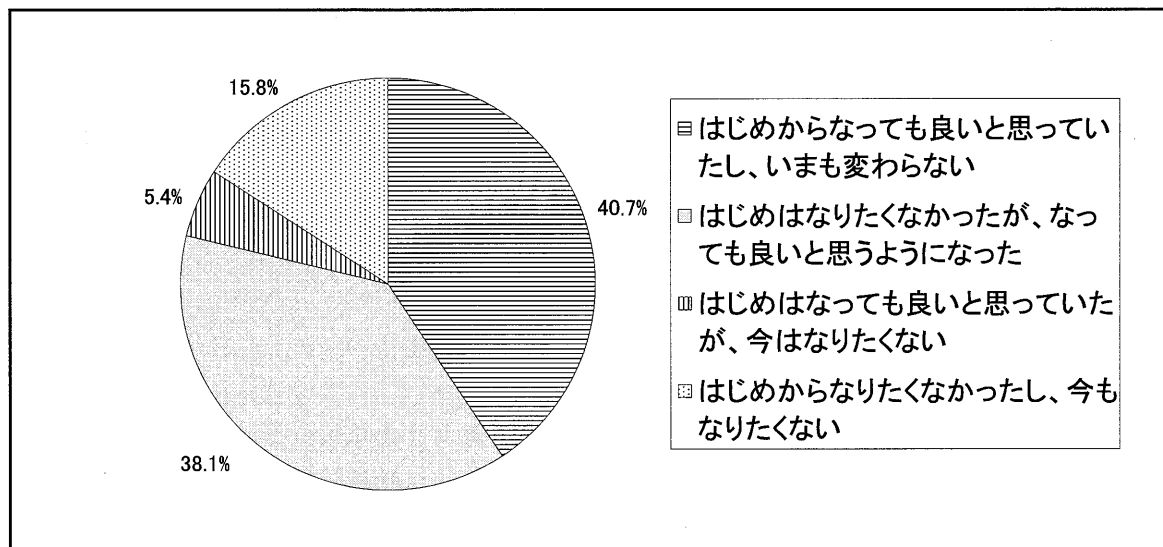


図3 模擬裁判参加前と模擬裁判参加後の意識の変化（サンプル数 1058）

また、アンケートの自由記述欄には、次のような記述が見られた。

自由記述欄 NO.1

- ①裁判員制度への関心が高まった。裁判員の重さを実感できた。アドバイザーの意見は大変興味深かった。証拠の重要性を知った。討論の重要性を再認識した。などの意見が多数。
- ②懲役4年の判決を出したが、過去の判例にうとかったために厳しい判決になったと思う。「それでも僕はやっていない」という映画を見て、「刑事裁判における有罪率99.9%は、結果でなく前提となっている」という言葉にはっとさせられた。自分たちも最初から有罪という線から入っていて、証拠がある程度「常識的」に有罪を示していたら有罪とした。客観性を欠いていたと思う。裁判員制度で客観性を欠き、私情に流され、有罪と決めてかかる裁判員が出るのではないかと心配だ。

- ③模擬裁判を経験して、裁判員制度が導入されたら「厳罰化」の流れになると思った。被告人をはじめから疑いの目で見ずに、証拠を冷静にみて判断することを裁判員に理解してもらうようにしなければならないと思った。評議は、証拠を真ん中においての「ディベート」なんだと思った。
- ④アドバイス役の検事さんの意見に流されてしまったことを、後で指摘されて気がついた。本番では、裁判官のアドバイスはどのようになるか考えさせられた。

このように生徒たちは、模擬裁判を通して、「事実」を見つけようと努力し、評議を通して自分の意見をきちんと主張し、また、相手の意見を聞き取り、合意形成をして、公平な第三者として判決を下そうと努力していた。さらに、模擬裁判実施により「はじめはなりたくなかった」53.9%（570人）のうち、70.7%（403人）の生徒が裁判員に「なっても良いと」思うようになった。

これらのことから、生徒の「裁判員制度への参加意識を醸成する」との目的は達成されたと考えられる。また評議の様子や自由記述欄 NO.1 (以下 NO.1) から、はじめに挙げた法教育の目的も達成されたと考える。以上の実践・資料などから、模擬裁判は法教育の効果的な手段であることが結論づけられる。

(2) 参加意識が変化しなかった生徒の分析

次に、裁判員裁判への参加意識が「はじめからなっても良いと思っていたし、いまま変わらない」「はじめからなりたくなかったし、今もなりたくない」と変化しなかった生徒を分析したい。

第1に、「はじめからなっても良いと思っていたし、いまま変わらない」と答えた生徒のアンケートは自由記述欄 NO.2 (以下 NO.2) のような記述がほぼ全てであった。このことから、気持ちが変わらなかったのは、模擬裁判の経験がプラスにはたらき、裁判員への前向きな気持ちがさらに高まったからだと分析できる。

自由記述欄 NO.2

- ①「身近な司法」のための裁判員制度だと実感できた。
- ②裁判員への関心は以前からあり、今回の模擬裁判を経験していいよなってみたくなった。
- ③模擬裁判そのものが楽しかったし、貴重な体験だったので何回かやってみたかった。
- ④法曹界への関心がわいた。
- ⑤よい経験になった。この経験を将来に生かしたい。

第2に、「はじめからなりたくなかったし、今もなりたくない」と答えた生徒は、自由記述欄 NO.3 (以下 NO.3) のような記述がほぼ全てであった(自由記述欄 NO.4 (以下 NO.4) と重複する記述が多い)。このことから、上記の分析と正反対に、模擬裁判の経験がマイナスにはたらき、裁判員になる気持ちがさらに後退したからだと分析できる。

自由記述欄 NO.3

- ①一般市民に「有罪」「無罪」の判断をさせることは無理だと感じる。そのために、「法律のプロ」の裁判官がいるのだと思う。
- ②自分のひと言で、被告人の人生が左右されることに怖さを感じた。
- ③「有罪」「無罪」が微妙になる事件で、公正で理性的な判断をする自信がない。
- ④法律を知らない私たちが、法的な判断をするわけにはいかない。
- ⑤裁判員は、やはりなりたい人だけがなればよい制度だと思った。

以上の考察から、「はじめからなっても良いと思っていたし、いまま変わらない」と答えた生徒は、裁判員裁判への参加意識はかえって高まったので、模擬裁判を経験させることは肯定できるが、はじめから「なりたくない」と考えている生徒の参加意識を動かすには、模擬裁判の経験だけでは足りないことが分かる。つまり、模擬裁判以外の手法か、模擬裁判実践に注意が必要となる。この点は、次の(3)で考察したい。

(3) 「はじめはなっても良いと思っていたが、今はなりたくない」生徒への対応

次に注目したいのは、アンケートで「はじめはなっても良いと思っていたが、今はなりたくない」と回答した 5.4% の生徒である。どのような理由で「なりたくない」という気持ちに変わったかを分析することは、国民の司法参加を目指す裁判員制度の根幹にかかわるので、その対応を考えてみたい。

なぜ「はじめはなっても良いと思っていたが、今はなりたくない」と、気持ちが変わったのかについて、仮説を2点立てた。

第1の仮説は、「刑事裁判の流れが理解できなかった」「裁判員の役割が理解できなかった」ために、模擬裁判の目的や内容が理解できなかったため、裁判員への拒否反応がおきたのではないかというものである。教育心理学などの裏付けがなくとも、「わからないこと」は「おもしろ

くない」ことであり、「興味・関心を失う」ことは容易に想像がつくからである。

第2の仮説は、裁判員の責任の重さに気づいたからではないかというものである。県立千葉高校の生徒たちは好奇心旺盛で、何でもチャレンジしようとする生徒が多い。そのため、「裁判員に興味」があったが、実際に模擬裁判を経験して、その責任の重さに気がついたためにならなくなったのではないかと考えたからである。

まず、仮説1の「刑事裁判の流れや裁判員の役割が理解できなかったのではないか」を検証したい。この仮説について、生徒のアンケート結果は表1のとおりである¹⁴⁾。

下の表1の「はじめはなっても良いと思っていたが、今はなりたくない生徒」と「それ以外を回答した生徒」の5段階評価の平均を比べてみると、ほとんど差は認められない。つまり、「刑事裁判の流れが理解できなかった」り、「裁判員の役割が理解できなかった」ために、裁判員にならなくなかったとは考えられないのである¹⁵⁾。また、NO.4に示すアンケートの自由記述欄を見ても、「刑事裁判の流れ」や「役割」が「理解できなかった」という記述はない。このことから、仮説1は不適当と考えられる。

表1 模擬裁判の評価の比較

項目 \ 回答者	はじめはなっても良いと思っていたが、今はなりたくない生徒	それ以外を回答した生徒
刑事裁判の流れが理解できた	4.3	4.2
裁判員の役割が理解できた	4.3	4.3
模擬裁判に対する総合評価	4.3	4.4

次に、仮説2の「裁判員の責任の重さに気がついたのではないか」を検証してみたい。

仮説2を検証するために2012年度分の「はじめはなっても良いと思っていたが、今はなりたくない」と回答した生徒の自由記述をすべてあげ、「なぜなりたくないになったのか」の理由をA～Eに分類したものが、次のNO.4である。また、次



写真3 評議の風景

頁の表2は、NO.4でA～Eに分類した理由を集計した結果である。

自由記述欄 NO. 4

- ・裁判員の責任がこんなに重いとは思っていなかった。他人の人生を決める裁判に一般人が参加することは想像以上に大変なことだと思う。そのため、法律のプロたちに任せるべきだと感じた (A)。また、今回の模擬裁判で、裁判員制度にはメリットもあるが、デメリットもたくさんあることがわかった (E)。
- ・9名で話し合いましたが、有罪・無罪の数が僅差であると、「ここで私が〇罪と言ったら、被告人は〇罪になってしまう」と、周りの意見に惑わされてしまうことが多くあるように思いました。それでなくても、一般人が裁判に参加するということは大きな心理的負担だということに、自分の意見で被告人の人生を大きく左右してしまうということは、とてもつらいという気持ちになりました (A)。
- ・被告人の人生を左右することが大変であり (A)、また判決後、被告人から恨みをかわないかが心配である (C)。
- ・はじめは裁判についてよく知らなかったの、裁判員になっても良いと思っていたが、模擬裁判を経験して、有罪・無罪を決める責任の重さを知り、やりたくないになった (A)。また、自分の意見を相手に伝える難しさも実感した (D)。
- ・これまでの自分の経験では、被告人の有罪・無罪や量刑は決められない (A) (B)。

- ・裁判員は結局は素人だから、どうしても理性より感情が勝ってしまうと思う。そうすると真実から遠ざかってしまうだろう (B)。
- ・これまで裁判員になっても良いと思っていたのは、裁判が自分の人生経験につながると思っていたからだ。甘かった。場合によっては人の生死を握る場合もあるので、人生経験の浅い自分はそのようなことに首を突っ込みたくないと思った (A)。

また、証拠だけで判断することがいかに難しいかわかった。論理の積み上げで判断していると思っていることに、どれだけの「主観」が入っているかが模擬裁判でわかった (B)。ディベートなどを行ってから模擬裁判を行うべきだと思う (D)。

- ・裁判は、人の人生を決めてしまうので、そのような重大なことを自分が決められないから (A)。それにしても、「話し合い」は重要だ (D)。
- ・模擬裁判は楽しかったが、実際の裁判員になったら、被告人の人生を決めてしまうので重たいと思った (A)。自分の意見をしっかり持って話し合いにのぞむべきだと思った (D)。
- ・有罪か無罪か完全に言えないときに、自分の一票が被告人の人生を決めてしまうことを考えると、自分で抱えることは出来ない責任を感じる (A)。
- ・裁判そのものや量刑などについて十分な知識がない素人が裁判をして、公平・公正かわからない。しっかりと知識を持つプロがやった方がよいと思う (B)。
- ・はじめは裁判に興味があり、また、裁判員の仕事もそこまで大変ではないと思っていたので裁判員になりたかったが、今回模擬裁判を経験してみて、グレーな事件や証拠の時は本当に判断は大変で (B)、被告人の人生を左右したくないと思った (A)。証拠を判断するときが一番怖いと思う。それによって有罪・無罪が決まるからだ。

- ・専門家ではない自分が、多くの証拠などから判断するのは負担が大きいと感じた (A)。また裁判が、小学校で学ぶような討論会と同じように行われていることに感動した。きちんとした話し合いが必要だと思う (D)。
- ・自分が「市民の感覚を備えている」かどうかわからない。そのため、人の人生を左右したくはない。せめて希望制にしてはどうだろうか (A)。
- ・確実な証拠とは何か、いろいろな可能性が考えられて、誤った判決を下す可能性が怖い。そのため、裁判では積極的に質問すべきだと思った。その過程で、誤った見方や先入観が消えていくと思った (B)。
- ・裁判員はもっと簡単なものだと思っていたが、想像以上に判断が難しく、自分の判断で被告人の人生が変わってしまうと思うと、責任の重さを感じてしまうから (A)。

表2 裁判員になりたくない理由

理 由	%
A 責任が重い (誤判の可能性を含む)	52.5
B 公平な判断ができるか不安	34.1
C 被告人から恨みをかう可能性がある	1.2
D 討論能力を養う必要がある	8.5
E その他	3.7

表2から、裁判員の「責任が重い (誤判の可能性を含む)」と「公平な判断ができるか不安」とを合わせると86.6%になり、「はじめはなっても良いと思っていたが、今はなりたくない生徒」の10人のうち9人近くの生徒が、裁判員の責任の重さなどを実感して、裁判員になりたくなかったことが分かる。

6 模擬裁判の配慮事項

模擬裁判の目的の一つは、模擬裁判を経験することによって、裁判員への心理的ハードルを下げ、将来、裁判員候補になったときも辞退することなく裁判員になってもらうことである。しかし、模擬裁判には逆の効果もあることがわかった。高校生は、模擬裁判に真面目に取り組

むため、かえってこのような結果になるのである。では、高校生の「責任が重い」と感じる気持ちをどのように取り除いたらよいのだろうか。

第1に、裁判はチームで行うことを、模擬裁判前後の授業で徹底することである。最高裁判所の「裁判員裁判」に関するホームページには次のような文章がある¹⁶⁾。

たしかに、刑事裁判は人の一生を左右するものですから、決して裁判員の責任が軽いものということとはできません。

しかし、裁判員は1人だけで「裁く」のではありません。他の裁判員や裁判官とともに、いろいろな疑問や意見を出し合った上で、いわば「一つのチーム」として、結論を見つけていくのです。有罪・無罪あるいは刑を決めるという判断は、安易に下せるものではありませんが、チームの全員が一体となって、真剣に議論した結果であれば、妥当な結論に至ることができるはずです。

裁判員に期待されている役割の実際の姿を、ご理解いただければ、国民の皆さんの漠然とした不安はずいぶん解消するのではないかと考えています。

ディベートでは、試合後の講評やディベーター同士、またはオーディエンスとの意見交換を行う「アフターディベート」が重要とされている。同様に、模擬裁判前後（特に模擬裁判後）に、裁判はチームで行うことを十分理解させる必要があるだろう。

第2に、もし万が一「誤った判断」を下した場合でも、日本では三審制を採用しているので、上級審で十分リカバーされることを理解させる必要がある。高校生は「真面目」なため、自分の判断に誤りを認めたくないことも分かる。しかし人間である以上「間違いを起こさないはずはない」ことを前提に、法の支配や三権分立、そして三審制などで「間違いの修正」が制度的に保障されていることを理解させることである。

第3に、公平な判断が出来るか不安感を持つ生徒たちへは、その難しい判断を助けるために

専門家がいることを周知することである。具体的には、模擬裁判では各評議体に1～2名の専門家を配置したし、裁判員裁判では裁判官が同席している。その専門家を利用することによって「責任の重さ」を軽減させることである。ただし、専門家のアドバイスは「諸刃の剣」になりうることに注意しなければならない。日本人は、一般的に「専門家信仰」があるといわれている。もし裁判員に選ばれて評議の際、専門家である裁判官の意見を真似るだけの裁判員であったならば、市民感覚を導入しようとする裁判員制度の根幹を揺るがしてしまう。このような微妙な「さじ加減」もまた模擬裁判の課題となる。

模擬裁判には、以上のような配慮が必要である。そして、教育効果を高めるためには、4(2)「県立千葉高校の模擬裁判の特徴」で挙げたように、各校で様々な工夫が必要であろう。その意味で、「模擬裁判」は研究途中にある教育方法であるといえる。

7 おわりに

以上が、模擬裁判を通しての法教育である。このような「活動型」「体験型」の授業により、それまで「遠い存在」と感じていた司法や裁判員裁判を身近に感じさせることが出来る。さらに、裁判劇から「事実」を探り、評議を通して「討論」や「合意形成」を「公正」に行う資質を養うことが出来るのである。

最後に、今後の課題などを挙げたい。

第1に、評議（議論）にはスキルの蓄積が必要である。学校に議論の文化を根付かせるために、また生徒を育てるためにも、模擬裁判と他のスキル獲得の手法（例えばディベートやプレゼンテーションの授業）を組み合わせ、年間の授業計画を立てる必要があるだろう¹⁷⁾。今後は、年間を通した「模擬裁判（法教育）カリキュラム」を確立する必要があると考えている。これからも、ディベート、政党作り、NIEなどと組み合わせたり、実施の順番を入れ替えたり、他のメソッドを開発するなどの研究を進めたい。

第2に、これまでも教育関係者や法曹関係者、研究者に模擬裁判を公開してきたが、保護者や地域への公開を検討したい。「開かれた学校づくり」と同時に、市民の裁判員裁判への意識変化を促すことになるからである。

第3に、これまでと異なる「模擬裁判」を実践してみたい。例えば、地方裁判所で開廷されている「裁判員裁判」を傍聴し、審理終了後、学校などで当該事件に関する評議を行い、その

後、地裁の判決との比較・検討を行うのである。これまで、模擬裁判は現実にあった事件をモデルにシナリオを作成しようとしてきたが、この提案は、現実の事件そのもので、裁判員裁判をほぼリアルタイムに体験できると考えられる。

このように模擬裁判は、まだまだ研究の余地がある。今後も、さらに模擬裁判の改善を続け、生徒たちに還元していきたい。

註

- 1) 最高裁判所「裁判員裁判の実施状況について」(http://www.saibanin.courts.go.jp/topics/pdf/09_12_05-10jissi_jyoukyou/h25_9_sokuhou.pdf)
- 2) 法務省「法教育研究会報告書」(2004年)13～14頁
- 3) 土井真一「法教育の基本理念－自由で公正な社会の担い手の育成－」大村敦志・土井真一編著『法教育のめざすもの－その実践に向けて－』(商事法務, 2009年)17頁
- 4) これまで、生徒に刑事手続きの具体例を考えさせたり、マンシオンや自治会のルールを作らせたり、班別討論やソクラテスメソッドを活用して民主主義や人権を考えさせる授業を展開してきた(<http://www.houkyouiku.jp/13011001>など)。また昨年度は、京都大学法学部の土井真一教授と「法教育」に関する往復書簡を行っていた(<http://www.houkyouiku.jp/>)。
- 5) 年間を通じて、時事問題などで新聞などを多く利用しNIEの実践も試みている。また本来、「政党作り」は、「政治・経済」の総まとめとして3学期に実施したいが、千葉地検の模擬法廷をお借りする都合でこのような計画となっている。「政党作り」については、拙稿「思考を深め、言語活動を活発化させる終末活動－政策論争をしてみよう－」『全国大会発表論文集 第9号』(日本社会科教育学会, 2013年)246～247頁を参照いただきたい。
- 6) 模擬裁判、ディベート、ODAを計画しようなど、これまで多くの「活動型授業」を行ってきたが、そのほとんどをビデオに収録した。記録としても重要だが、模擬裁判を実施するために流れなどを知りたい方へ配付するためでもある。また、優秀な発表などを翌年の生徒に見せて参考にさせた。優秀な発表などを翌年の生徒に見せると、その発表が生徒にとって「目指す目標」となり、年々レベルが上がることになる。
- 7) 群馬県桐生市広沢中学校の実践(http://www.center.gsn.ed.jp/21c/h17_21c/17genkou/asunaro_pdf/hirosawa_morijiri.pdf#search='%E6%A8%A1%E6%93%AC%E8%A3%81%E5%88%A4+%E6%8E%88%E6%A5%AD')、東京都千代田区立麹町中学校の実践(<http://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kosodate/chugakko/mogisaiban.html>)、神奈川県立湘南台高等学校の実践(<http://www.shonandai-h.pen-kanagawa.ed.jp/citizen/saiban3/saiban3.html>)など、多数挙げられる。
- 8) 「政治・経済」は2単位の必修で学年は8クラスだったため、筆者が学年全クラスの「政治・経済」を担当した(週16コマ)。県立千葉高校は、専門教科をまとめて担当する伝統があり、在籍した12年間は、学年全ての「政治・経済」を担当していた。
- 9) 法曹専門家のアドバイザーを置く理由は、裁判員裁判でも裁判官がいること、高校生だけでは専門的な判断に迷う場面があること、評議で論点が過不足なく議論されたか

チェックすべきことなどである。また、千葉県弁護士会法教育委員会の協力をいただき、アドバイザーは全クラスの模擬裁判に配置している。専門家との反省会は、<http://www.houkyouiku.jp/12030801> を参照。さらに、専門家の参加は、「キャリア教育」の視点から良い結果を生徒に与えている。

- 10) シナリオも中学校・高校の手作りのものや、検察庁・地方裁判所・弁護士会などから多数提案されているが、模擬裁判にかけられる時間的制約や配役・小道具など、学校の現状に合わないものが多く、最終的には法教育推進協議会作成のシナリオを改変した。2006年～2011年度に実施した模擬裁判のシナリオは、「おばあさんを突き飛ばし、5万5千円入りの巾着袋を奪い、2週間のけがを負わせた強盗傷害事件のシナリオ」を県立千葉高校の実情に合わせて利用した。しかし、ややマンネリ化していたこと、現実にあった事件を題材とし、判決との比較を試みたいなどの理由で、2012年、千葉県弁護士会の法教育委員会に属する4名の弁護士と新しいシナリオを作成した。その作成過程は、「法と教育学会 第4回学術大会」で発表した。
- 11) 千葉地検の特設模擬法廷は、県立千葉高校の最寄り駅からJRで一駅の蘇我駅から徒歩5分ほどのところにある。当日は、筆者が生徒を引率した。模擬裁判当日は時間割変更を行い、各クラス午後の2時間連続授業とし、昼休みに学校を出発して13時頃に到着、模擬裁判終了は15時半過ぎであった。帰りのHRは、担任の代わりに筆者が行い、生徒は現地解散となった。これまでの経験から、

模擬裁判は評議を含めて、最低2時間は必要だと感じている。

- 12) シナリオを誰に持たせるかについては、いろいろな考え方がある。ただし、全員に持たせると、裁判劇中も生徒はシナリオを読んてしまい裁判劇実施の意義がなくなってしまうので、一定の生徒にのみ持たせるべきであろう。2012年度は、「台詞のある配役」のみに配付した。そのため裁判劇中、多くの生徒はメモを一生懸命とることになる。なお、評議中に裁判劇への疑問が出たときは、アドバイザーがシナリオを持っているので補足や説明をしてもらった。
- 13) アンケートでは、生徒の変容や目的の達成状況などの検証を行っている。また、アンケートには「改善の提案」の欄を設け、生徒から改善策を募り、毎年改善を図っている。
- 14) アンケートは、2008年、2010年、2011年、2012年にとった。自由記述欄を除き、すべての項目は「5段階評価（5：よく理解できた、大変満足、4：だいたい理解できた、だいたい満足、3：普通、2：あまり理解できなかった、あまり満足できなかった、1：全く理解できなかった、満足できなかった）」で採点し、平均値をとっている。
- 15) アンケート項目の「模擬裁判に対する総合評価」とは、文字どおり「模擬裁判を経験した感想」であり、満足度を示す数値といえる。
- 16) 最高裁判所「裁判員制度」のHP（http://www.saibanin.courts.go.jp/qa/c4_4.html）
- 17) 拙稿「模擬裁判実施による生徒の変化」『法と教育 Vol.2』（法と教育学会、2012年）54頁